I-2

大正・昭和戦前期における「建築科学」の概念の変遷について
ー日本青年建築家聯盟の機関誌『建築科学』の分析を通じてー

On transition of the notion of the "architecture science" in the era of Taisho and Shouwa before World War II
ーAn analysis of the magazine " *Kenchiku Kagaku*" of JAPAN YOUNG ARCHITECTURE FEDERATION（JAF）ー

○庄司　兼悟[1]　　田所　辰之助[2]
Kengo Shoji　Sinnosuke Tadokoro

Abstract:
The " architecture science" is an agency paper JAPAN YOUNG ARCHITECTURE FEDERATION（JAF）issued from 1932 to 1933. Noguchi of the members of the SOUSHA had issued a magazine becomes the center. There is up to 1-6 issue. SOUSHA coterie other, DEZAM members of the Socialist ideology and SHINKO KENCHIKU KA RENMEI members has been contributed thesis.

１．はじめに

『建築科学』は日本青年建築家聯盟（以下 JAF）が 1932 年から 1933 年まで発行した機関誌である. 創宇社建築会（以下創宇社）のメンバーであった野口巌が中心となり発行していた. 1～6 号まであり, 創宇社同人他, 原沢東吾・白鳥義三郎・石原憲治など新興建築家聯盟に参加したメンバーや DEZAM など社会主義思想のメンバーが寄稿している. また『建築科学』発行の際に表明した主張の中で「吾々は現代の主たる建築理論を通して, この確固とした社会認識を基調とする建築理論の確立並びにその実践が現代の社会機構内で正当な発展過程を歩みつつあるだろうか否かを討究する義務をもつ」と宣言し, 建築理論の実践と社会的責任について言及している[1)].

２．研究目的と方法

創宇社同人である竹村新太郎が遺した「竹村文庫」に, 様々な建築運動に関する史料が収蔵されている. また JAF 発行雑誌『建築科学』も保管されている. これらの資料は僅少かつ貴重であるにも関わらず, 既往の研究では取り扱われてこなかった. 本研究では以下の項目に沿って研究を進める.

①大正・昭和初期に建築ジャーナリズム上で議論された JAF の前身である創宇社に対して「建築科学」がどのように理解されていたかを考察する.

②JAF 結成背景と機関誌『建築科学』の都市計画研究部でどのような議論が行われていたのか調査する.

③上記①②の作業をもとに「建築科学」の基本的概念、理論から実践へと移行した段階での変化を明らかにする.

３．大正期、昭和戦前期の社会的背景・建築界の動向

大正期, 日清戦争後には増税政策で貧富の差が生まれ, 日露戦争後にはそれが増大する. これにより民衆の解放思想が盛んになり「自我」,「自己」の言葉が氾濫し[2)], 建築界でも明治建築に反発する動きに発展した。そして自己の新たな創造的表現を生み出し「分離派建築会」（以下分離派）が誕生する. 大正 12 年には発生した関東大震災により東京市の大部分を倒壊, 焼失し既存の建築技術の崩壊を認識させ建築の合理化が進んだ. この震災を契機に創宇社が結成され, 同年 11 月には第 1 回の創宇社建築制作展覧会を開催するに至った. ただ 1930 年にプロレタリア建築理論を理想に掲げ第 8 回展覧会をもって解散している.

また新興建築追求のため, 分離派や創宇社などの建築運動が糾合し, 昭和 5 年に新興建築家聯盟（以下聯盟）が結成された. ただ外的弾圧によってわずか5ヶ月で瓦解した。しかししばらくして聯盟に参加していた創宇社のメンバーを中心として若手により JAF が結成された.

４．「建築科学」の概念について

大正期・昭和戦前期では「科学」という言葉そのものが議論されている. 戸坂潤『科学論』では紀元前まで遡り哲学との補完関係を解き、学問として包括的な考えを記している[3)]. また弓家七郎『科学の話』などでは唯物論的な考え方のみが語られている[4)]. これは同時代に資本主義に対する不満が高まり, 社会主義的思考が広まっていたことを意味するものである. これらの主張は一般的で, この時代の科学に対する見解は社会主義に傾倒していたものと考えられる.

１．日大理工・院（前）・建築
２．日大理工・教員・建築

一方で,建築ジャーナリズムでは川喜田煉七郎が生理学的な考察,気温の変化など医学・衛生学・気象学・心理学等の分野を総合する必要性に言及している[5].また山田守は建築家の役割は社会に意識的そして積極的に関係づけられた建築科学の研究で,それを促進する立場でなければならないとしている[6].そうした主張に対して田邊敏英は唯物論的思考・社会主義的な立場から建築理論と建築実践の発達過程、自然科学と社会科学の統一,整理する重要性を訴えている.

５．建築ジャーナリズム上の「建築科学」(実践的理論)と機関誌『建築科学』(理論的実践) の比較について

１）創宇社に対する「建築科学」の観点からの評価

JAF の前身である創宇社に対して建築科学(実践的理論)の観点から建築ジャーナリズム上では次のように語っている.川喜田煉七郎は、現実にある予想値を直接に定めて,現実のある人間の団体が或は組合が,その「生活状態を観察」し「経営費の捻出」の問題を考え,－土地買収費,建築費、維持費 etc－人数や部屋のゾーニングを定めることを理想の問題として、あらゆる目の前の現実の問題の解決として提案に努力した[7]としている.また山田守は前述した建築家の役割に対して現在は自己の研究を押売する結果となってしまっていて,一面的,不調和に非平衡的で科学的態度を冒涜するものであり、新興建築に残るロマンティシズムで一般的な通弊であると指摘している.そして田邊敏英は建築科学を現実の建築を分析してこれを新たなものにアウフヘーベン（止揚）するための方向を見出す有力で現実的な手段であり,それが理論的に総合されて進展するとき初めて有益な手段となるとし、建築科学の「弁証法的必然的認識とその実践」の重要性を訴えている.また自然科学はその姿、形は変わっても理論的・論理的弁証法の現れに他ならないとしている[8].

２）機関誌『建築科学』から読み取る JAF の「建築科学」

創宇社が前身である JAF の機関誌『建築科学』(理論的実践) では都市計画が多く議論されている.都市計画については、経済恐慌の立て直し・各産業部門の統制案・市区行政地域の拡張による統制経済との関係性に言及し資本経済を受容する動きが見える.具体例として住宅街の焼失、ビル火災、交通事故の頻発、衛生施設の不備等々を挙げている[9].石原憲治は近代建築国際会議で扱われたファンクショナルシティを取り上げ,住宅の集団的解決を都市計画の問題として捉え都市の形態を如何にするかということを具体的に示し説明している.例としてゾーニング（用途地域）ができたことによって交通の潮流が発生し混雑が起こったという問題を取り上げ,人口密度・分布を解決する方法としてロシアのバンドシュタット（帯状都市）を新しい都市計画として紹介している[10].

白鳥義三郎は石原の主張（ゾーニング）に加えて地価の暴騰にしたがって高層建築・アパートが出現し質が悪化したことで各所にスラムが出来たという衛生面での問題を取り上げ,地価・家賃の暴騰という経済面との関係性を指摘した.またこの論文ではある敷地を設定し,その敷地を公共的企業あるいは自治団体が適当な価格で買えない時は収容することができる,この収容法を行う時は価格の点以外は一切の異議を申し立てることができず,もし価格に対して異議を申し立てるのであれば公共建築組合が地方住宅委員会の決めた地代で強制的借用権を得ることができる,というドイツのジードルンクの法整備を例に挙げている.このような社会主義的提案で衛生面・経済面のジレンマを解消することを強く主張している.ただ資本主義社会に則ることが前提にあるため,社会民主主義に対応した提案の必要性も同時に訴えた[11].

６．まとめ

自然科学と社会科学の融合として構想された「建築科学」は,創宇社時代には社会科学が社会主義的思想に傾倒していたが,JAF では民主主義を基調とし資本経済を受容した社会民主主義的社会像を前提としたものへと変化していたことが明らかとなった.具体例として創宇社は設計方法論,JAF は都市計画を挙げた.創宇社は土地買収費,建築費,維持費などを考慮し社会的な認識を基に局所的な視点で建築理論を確立・実践へと導こうとした.一方 JAF は経済・法律などの運用面と交通や地域などの都市開発的側面を考慮し,大局的な視点実践的な方法として都市計画へと昇華させた.

なお、『建築科学』に寄稿していた石原憲治は交通基本法案の協議に加わり,白鳥義三郎は初代習志野市長として都市計画に尽力するなど,『建築科学』で培われた議論が後の彼らの実績へと繋がったと考える.

【参考文献】
1　日本青年建築家連盟（JAF）「主張」『建築科学』　1932 年 4 月 1 日
2　鈴木貞美『生命で読む日本近代』(日本放送出版協会) P104 1996 年
3　戸坂潤『科学論』(三笠書房) 1935 年
4　弓家七郎『科学の話』(世界思潮研究会) 1922 年
5　川喜田練七郎「『生活構成』の研究について」『建築画報』(建築画報社) 22-10
6　山田守「デモンストレーションとしての三十年創宇社展」『建築世界』(建築世界社) 24-11　p23-24　1930 年 11 月
7　川喜田練七郎「建築の展覧会とその作品」『建築世界』(建築世界社) 24-2　p16-23　1930 年 2 月
8　田邊敏英「建築実践と理論と」『建築世界』24-11　p25-29　1930 年 11 月
9　日本青年建築家連盟 (JAF)「吾々は何故都市計画を勉強しなければならないか？」『建築科学』　1933 年 2 月
10　石原憲治　日本青年建築家連盟（JAF）「ファンクショナル・シティに就いて」『建築科学』　1932 年 11 月
11　白鳥義三郎　日本青年建築家連盟（JAF）「都市計画と経済」『建築科学』　1932 年 11 月